環境新聞　平成28年（2016年）7月27日（水曜日）

寄稿

「シンガポール国際水週間2016」リポート

グローバルウォータ・ジャパン代表（国連環境アドバイザー）

吉村 和就

持続可能で強靭な都市へ

水問題を幅広く議論

日本企業の展示も盛況

アジア最大の水に関する会議・展示会「シンガポール国際水週間（SIWW）2016」が先月11～13日、「持続可能で強靭な都市の水環境ソリューション創造」を主要テーマにシンガポールのマリナ・ベイ・サンズ・コンベンションセンターで開催された。今回で7回目を迎える同会議では、世界各地の政策関係者や水問題の専門家、水に関する各国関係機関のトップが一堂に会し、各国の基調報告、ワークショップ、ビジネスフォーラムを通じ、水に関する諸問題が幅広く討議された。併設された「水エキスポ」は処理技術やサービス、製品をテーマとする水処理分野の総合見本市となっており、大きな盛り上がりを見せた。事務局の発表では期間中、世界133カ国から約2万人が参加した。同エキスポには約800ブースを超える展示があり、日本は日本貿易振興機構（ジェトロ）主催の「ジャパン・パビリオン」（写真）に28団体、そのほかにも単独でブースを構えている企業も多く、開催国シンガポールに次ぐ存在感を示した。

合同基調講演

11日は、「SIWW」「世界都市サミット」「クリーン環境サミット」の3大イベント合同で約2千人の参加者を前に基調講演が行われた。冒頭、シンガポール大学のトミー・コー教授は「世界人口の7割が都市に住み、水の果たす役割が年々重要となっている。また温暖化の影響とみられる水災害も頻発」しているとし、ダボス会議での首脳宣言や仙台市での「国連防災宣言」を確実に実行していくことが我々の課題であると述べた。またデンマークのエスベン・ルーデ環境・食糧相は「デンマークは全ての水資源を地下水に頼っている、その量が年々減少してきていることから、水の節約とともに水質改善に国を挙げて取り組んでいる」と、またネッスルSAのブラベック会長は「ネッスルは世界中に生産拠点を持っているが、この10年間で水の使用量を50%削減した。我々はその国の水資源を大切に使うことを宣言」していると述べた。

水エキスポ

国別のパビリオンでは、18カ国（シンガポール、米国、カナダ、デンマーク、イスラエル、中国、ドイツ、英国、韓国、オランダ、台湾、日本など）が展示を競い、その中でも開催国シンガポールを除き最大のスペースを設けているのがジャパン・パビリオンである。

ジャパン・パビリオンでは、水ing、JFEエンジニアリング、キッツ、栗田工業、東洋紡、住友電工、鹿島建設、富国工業、クラレなど、また自治体関係では福岡市、横浜市、日本下水道協会、水といのちとものづくりの中部フォーラム、横浜市水ビジネス協議会などが出展した。また単独で大きなブースを構えていたのはメタウォーター、東レ、日東電工、明電舎、三菱電機など。異色な展示はバルブ最大手のキッツ。新規事業として養殖魚技術「アクアカルチャー」を展示、東南アジアの投資家の注目を集めていた。

なお、次回SIWWは2年後の2018年7月に同所で開催される。